

19 世紀後半のスペインにおけるイスラム研究
- メネンデス・ペラーヨとアラビスタ -
Research on Islam in late nineteenth century Spain
-Menéndez Pelayo and arabistas-

関智彦 (Seki Tomohiko)

摘要

This paper is concerned with tracing the genealogy of Islamic studies in late nineteenth century Spain, and evaluating its historiographical significance in both Islamic and Spanish historiography. The focus is on the interaction that Menéndez Pelayo had with Arabists for his research on Islam. First, the author indicates Pelayo's relevance to Islamic studies by analyzing the historiographical vision reflected in *La ciencia española*, and the emphasis that he placed on the Spanish heterodoxy. In order to visualize his position in Arabism, we compare this vision to mentions of Pelayo observable in the catalog of epistles exchanged between foreign scholars and Asín Palacios, a Spanish Arabist. Then, the author analyzes the epistles exchanged between Pelayo and his disciple, Asín, to examine their specific contributions to Spanish Islamic studies, situating their research exchange in the unstable background of late nineteenth century Spain.

The author considers the research exchange between Menéndez Pelayo and Asín Palacios the foundation of a genealogy of studies on Islamic philosophy particular to Spain, which contributed to a Spanish philosophical historiography that owes much to several mediaeval Spanish Muslim philosophers.

キーワード (Keywords)

イスラム研究、メネンデス・ペラーヨ、アラビスタ、アシン・パラシオス、研究交流、書簡
(Islamic studies, Menéndez Pelayo, Arabists, Asín Palacios, research exchange, epistles)

1. はじめに

ウマイヤ朝イスラムの侵略を受けた 711 年からユダヤ人追放令が発布された 1492 年にかけてのスペインでは、カトリックとユダヤ教徒、イスラム教徒が緊張の下で共存した。後二者は 13 世紀後半にアルフォンソ十世賢王 (Alfonso X el Sabio、1221–1284) が設立したトレド翻訳学校において、アラビア語文献とヘブライ語文献のラテン語翻訳に大きく貢献した。この歴史的経緯により、スペイン思想史学においてイスラム思想史は重要な位置付けを占めており、19 世紀後半から 20 世紀にかけてフリアン・リバーラ・イ・タラゴ (Julián Ribera y Tarragó、1858–1934、以下フリアン・リバーラ) やミゲル・アシン・パラシオス (Miguel Asín Palacios、1871–1944、以下アシン) をはじめとする著名なアラビスタにより研究が推し進められた。

しかし、1833年から1876年にかけて保守主義者と自由主義者が社会体制をめぐるカルリスタ戦争を繰り広げ、後者が勝利した後も対立が続き、過敏な社会環境が醸成されていた（ペレス 2017: 204-207）。また、当時のスペイン史学においては形而上学的要素が唯物論的史観に取って代わられつつあった一方、自由主義派のスペイン人歴史家がフランスの実証主義歴史学に傾倒していた（Menéndez Pelayo, *heterodoxos*, V: 483-486）。当状況下では、この学術的要請を満たさないスペイン国内の学術成果は軽視され、正当に評価されなかった（Farinelli 1956: 21-22）。

特に評価が進まなかった史的事象として異端者史を挙げることができ、イスラム思想史も例外ではなかった（Álvarez Barrientos 2012: 46）。それを受け、精神史分野において膨大な研究成果を遺したスペインの碩学マルセリーノ・メネンデス・ペラーヨ（Marcelino Menéndez Pelayo、1856–1912、以下ペラーヨ）はカトリックでありながらも、教会を軸とするスペイン思想史の脈絡における異端者および異端思想の重要性を主張した（Artigas 1939: 175-198）。彼の初期の著作である『スペインの学術』（*La ciencia española*, 1876、以下『学術』）と『スペイン異端者史』（*Historia de los heterodoxos españoles*, 1880–1882、以下『異端者史』）において、彼はスペイン固有の知的潮流の中でも中世イスラム思想史に重点を置いている（Farinelli 1956: 21-22）¹⁾。

ペラーヨのイスラム哲学に対する強い関心は師弟関係にあったアシンとの密な研究交流により裏付けられている。ペラーヨは保守主義的な思想的立場とは裏腹に国内外の著名なスペイン思想史学者や文学者、思想家と書簡を通じた交流および研究協力を行っていたが、アシンは彼と面識があった数少ない知識人の一人であった（H. Clarke 2012: 296, 301-302）²⁾。彼らは共にカトリックであり、アシンは司祭でもあったが、スペイン思想の発展におけるイスラム教徒の役割を強調している（Aly Ahmed 2018: 30）。アイン・シャムス大学のスペイン思想史学者である Aly Ahmed は、アシンが中世のイスラム哲学者の貢献を中心に、スペイン固有の思想潮流に関する師の理論を発展させたことを指摘している（Aly Ahmed 2018: 33）。しかし、その過程を示す重要資料である両者の書簡がほとんど分析されておらず、当時のイスラム学の具体的な学風や、ペラーヨの思想史観と学術観の有機的な関係性、当時のイスラム学とスペイン史学における両者の交流の具体的な意義が不明確である。

そのため、本稿ではまず、『学術』や『異端者史』を基にペラーヨの学術観におけるイスラム思想史の具体的な位置付けを明らかにする。次にアシンとフリアン・リベラの書簡カタログを基にイスラム学におけるペラーヨの位置付けを把握した上で、ペラーヨとアシンの書簡集を分析する。一連の考察により、19世紀後半のスペインのイスラム研究とスペイン史学全体において、ペラーヨとアシンの研究交流が有した史学史的意義を明らかにする。

2. ペラーヨと19世紀後半のイスラム研究

2.1 ペラーヨの学術観

19 世紀後半のスペインにおいて、スペイン固有の思想史的脈絡の喪失を懸念していたペラーヨは西洋思想の発展におけるスペイン固有の思想潮流の影響を著書において強く主張した。この懸念を強く反映する著作として『学術』を位置付けることができる。同著の一卷目と二巻目はペラーヨと同時代の知識人の間で交わされた書簡から構成されている (Menéndez Pelayo, *ciencia*, III: 367-372)。これら二巻では、当時のスペインにおいて学術を取り巻いていた時代環境が明示されている。その一方、第三巻は 19 世紀までの知的系譜に関するモノグラフィーから構成されている。西洋哲学史、アジアやアメリカ大陸も含む様々な言語文化、政治学、法学、文献学などの人文系学問のみでなく、医学や農学、植物学という自然科学もスペインを軸に体系化されている (Menéndez Pelayo, *ciencia*, III: 370-372)。

このように幅広い知的系譜を網羅する『学術』の第一部 (Primera Parte) はラベルデへの書簡という体裁を取っており、複数の章から構成されている (Menéndez Pelayo, *ciencia*, I: 29-199)。『学術』の第一部において、ペラーヨは 19 世紀後半のスペインにおいて索引と事典により体系化されていない重要分野を踏まえつつ、精神史学者である彼の専門性を強く反映した 33 分野から成る彼独自の学術体系を提起している (Menéndez Pelayo, *ciencia*, I: 82-84)。主な構成分野が文献学、思想史、文学史である一方、考古学や地理学という文化人類学の関連分野も含まれている (Menéndez Pelayo, *ciencia*, I: 82-83)。また、動物学や植物学、数学などの自然科学分野において活躍したスペイン人知識人に関するモノグラフィーも提起している (Menéndez Pelayo, *ciencia*, I: 83-84)。これらの分野を含む彼の学術体系においては、理系学問も人文系学問と同様に文献学的手法により扱われており、知識人の歴史として提示されている。スペインの知的脈絡の喪失に対する彼の懸念を踏まえれば、専門外であった自然科学を含めた目的は 19 世紀後半の国内外で過小評価されていた、当分野におけるスペインの学術的貢献の存在を主張することであったと考えられる³⁾。この包括的な学術観は『学術』第三巻の構成に明確に反映されている (Menéndez Pelayo, *ciencia*, III: 370-372)。

上述の学術体系は、複数の分野との強い関連性を有する一大項目として「スペインの異端者」 (Heterodoxos españoles) が位置付けられている点において独創的である (Menéndez Pelayo, *ciencia*, I: 83)。モノグラフィー化されている関連項目としては、神学者や修道会史研究者、禁書、錬金術師、神秘主義者、美学思想家、叙事詩人、抒情詩人などが挙げられる (Menéndez Pelayo, *ciencia*, I: 82-84)。これらの項目の多くが宗教的な異端に直接関連している一方、美学思想家や叙事詩人、抒情詩人は宗教よりも思想史や文学史、風俗史との関連性が強い。このようにペラーヨは「スペインの異端者」を幅広く関連付けているが、彼による異端の定義は広範であった。彼はカトリシズムにおける異説に加え、カトリシズム以外の宗教思想、カトリシズムの教義に抵触する哲学思想も異端と定義していた (Menéndez Pelayo, *heterodoxos*, I: 51-52)。ペラーヨはこの定義に基づき、様々な哲学思想やそれを反映する文学なども異端者と関連付けたのである。それは『異端者史』第二巻の多くの章を錬金術や神秘思想に割り当てていることや、『哲学批評に関するエッセ

イ』（*Ensayos de Crítica Filosófica*, 1892、以下『哲学批評』）の第一章をスペインの異端思想におけるプラトン哲学に割いていることにも見て取れる（Menéndez Pelayo, *Ensayos*: 60-61）。それを踏まえれば、精神史分野を中心に構成されたペラーヨの学術観において、「スペインの異端者」は多くの分野と密接に関わる重要な項目であったと言える。

2.2 ペラーヨの学術観におけるイスラム

ペラーヨの学術観において大きな重要性が付されていた異端者の中でも、イスラム教徒には『学術』を含む彼の多くの著書において章や節が設けられている。例えば、『学術』の第三巻では、哲学史や文献学、医学の章にイスラム教徒と関連する節が設けられている（Menéndez Pelayo, *ciencia*, III: 370-372）。『異端者史』の第二巻においては、スペインのキリスト教思想におけるセム哲学の浸透に関する章にイスラム思想の発展に関する節や、トレド翻訳学校に関する節、12世紀のスペインのアラビア学者に関する節が含まれている（Menéndez Pelayo, *heterodoxos*, II: 151-202）。また、8世紀から15世紀のスペインにおける魔術と迷信に関する章には、12世紀から13世紀の宮廷と世俗社会における魔術や迷信の実践や、15世紀スペイン文学における魔術への言及に節が割かれている（Menéndez Pelayo, *heterodoxos*, II: 395-459）。その一方、『哲学批評』には12世紀のイスラム哲学者であるイブン・トゥファイル（1105-1185）に一つの章が当てられている。これら三つの著書に共通してイスラム思想と関連する章や節が見られるため、ペラーヨはスペイン思想史の脈絡においてイスラム思想を重視していたことが分かる（Menéndez Pelayo, *Ensayos*: 313-333）。また、思想史のみでなく、文学史や文献学、医学史におけるイスラム教徒の影響に着目していることは、彼が複眼的にイスラム教徒を捉えていたことを示している。

以上を踏まえると、ペラーヨの学術観において、イスラム研究は精神史分野の様々な項目と関連付けられる重要な位置付けにあったと言える。その重要性をスペインの思想や科学の発展におけるイスラム教徒の歴史的貢献自体に帰する意見は十分に考えられる。しかし、ペラーヨは19世紀後半のスペインにおいて異教徒の史的貢献が軽視される状況を危惧したため、イスラム教徒を含める史的脈絡の重要性を自らの著作においてより一層強く主張したのである。イスラムに対するこの姿勢は『異端者史』全体においてカトリック教会と異端、国内外の哲学思想をスペインの思想的系譜に据える思想史観を打ち出したことにも表れている（Menéndez Pelayo, *heterodoxos*, VIII: 567-591）。また、同著の第六巻において彼の歴史観に対するヘーゲルの弁証法的歴史観の影響を肯定していることも、正統と対立する異端の存在を重視する彼の歴史観を裏付けている（Menéndez Pelayo, *heterodoxos*, VI: 369-372）。すなわち、彼がイスラム思想史を重視する背景には、スペインの思想史的脈絡を重視する保守派の知識人としての立場が見出せるのである。次章では、上述した学術観や思想史観、思想的立場を踏まえつつペラーヨとアラビスタの書簡を分析し、ペラーヨが19世紀後半のアラビスタと行った研究交流や、当時のイスラム学における彼の研究者としての位置付けを考察する。

2.3 イスラム研究におけるペラーヨ

『学術』を出版する 1876 年から他界する 1912 年まで精力的に活躍したペラーヨは彼の保守的な思想的立場とは裏腹に、スペイン文学史やスペイン思想史に関する著書の執筆や書簡を通じて国内外の知識人との研究交流を行っていた。彼の交流にもイスラム思想史への強い関心が反映されている。例えば、ペラーヨは 11 世紀後半から 12 世紀初頭のスペインのイスラム哲学者アル・ガザリー (Al-Ghazālī, 1058–1111) に関するアシンの著書 *Algazel: Dogmática, Moral, Ascética* (『アルガゼル：教義学、倫理学、美学』) に序文を寄稿している (Asín Palacios 1901: XII-XXXIX)。また、『異端者史』の序論から、イスラム思想史に関するドイツとフランスの学術成果にも強い関心を示していたことが分かる (Menéndez Pelayo, *heterodoxos*, I: 33)。イスラム研究におけるペラーヨの主な関心は中世初期のスペインにおける、イスラム思想のキリスト教思想への浸透であり、この視点から論集 *Beiträge zur Geschichte der Philosophie des Mittelalters* (『中世哲学史への貢献』、1891–1927) における上記二国の成果を評価している (Menéndez Pelayo, *heterodoxos*, I: 33)。主に 12 世紀スペインの思想家および翻訳家であるドミンゴ・グンディサルボ (Domingo Gundisalvo, 1115–1190) についての論文を高く評価しており、本論集への寄稿者の学術成果が『異端者史』第二巻の第三章においても多く引用されている (Menéndez Pelayo, *heterodoxos*, II: 186)⁴⁾。そのため、ペラーヨはスペイン国内や多くのアラビスタを輩出したフランスのみでなく、ドイツをはじめとする近隣国の学術成果も視野に入れつつ、イスラム研究を行っていたと言える。

その一方、スペインのイスラム研究におけるペラーヨの貢献は 19 世紀後半のスペイン人アラビスタの間でも広く認識されていたようである。2009 年にスペイン科学研究高等会議 (Consejo Superior de Investigaciones Científicas) から出版されたフリアン・リベラとアシンの書簡カタログによれば、前者宛の 46 通の書簡と後者宛の 38 通の書簡においてペラーヨが言及されている (Marín et al., 2009: 892, 953)。両者に宛てられた 84 通の書簡のうち 17 通が同時代のスペイン人アラビスタによるものであり、差出人はエドゥアルド・サーベドラ・モラガス (Eduardo Saavedra Moragas, 1829–1912)、フランシスコ・コデーラ・イ・サイディン (Francisco Codera y Zaidín, 1836–1917) やパスクアル・メネウ・イ・メネウ (Pascual Meneu y Meneu, 1857–1934)、アンドレス・ヒメネス・ソレル (Andrés Giménez Soler, 1869–1938)、ラモン・メネンデス・ピダル (Ramón Menéndez Pidal, 1869–1968)、アンヘル・ゴンサレス・パレンシア (Ángel González Palencia, 1889–1949) であった (Marín et al., 2009: 453-625)。彼らの主な研究関心はスペインのイスラムに関する思想史的研究や文学的研究、文献学的研究であった。これらの研究分野の土台を成す重要な学術成果を生み出したフリアン・リベラとアシンへの書簡においてペラーヨが言及されていることは、上記の分野における彼の貢献の重要性を示している⁵⁾。

以上を踏まえると、ペラーヨは思想的な観点からイスラム研究を行っており、当分野におけるスペインの学術的貢献を国外も含めたイスラム研究の全体的な動向に位置付けていたことが分かる。彼自身が『異端者史』をはじめとする著作において国外の学術成果を引用していることや、国外の知識人から当分野における彼の業績が注目されていたことは、それを裏付けている。しかし、フリアン・リベラとアシンが 19 世紀スペインのイスラム思想史学の系譜に位置付けられている一方、ペラーヨは精神史分野全体における彼個人の功績が大きいため、ペラーヨ研究の範疇において評価される傾向にあった (de la Plaza 2006: 95-122)。つまり、ペラーヨはイスラム思想史研究への貢献とは裏腹に、当分野の学術的系譜に位置付けられてこなかったのである。確かに、膨大な学術成果を遺したペラーヨはスペイン精神史学を体系化することにより後の思想史研究の基盤を築いたため、彼個人の学術的貢献や人物像はスペイン思想史学における一研究テーマとして成立し得る。実際に彼に関する論集や評伝も出版されている⁶⁾。しかし、イスラム思想史学における貢献により国内外のアラビスタから注目されていたペラーヨは、西洋におけるイスラム研究史において重要な位置付けを占めていたのみでなく、フリアン・リベラやアシンと共に 19 世紀スペインのイスラム研究の系譜を成していたのである。

このようにペラーヨのイスラム研究への貢献は国内外のアラビスタに広く認知されていたが、彼が特に深く交流したアラビスタはアシンであった。アシンはイスラム思想史やイスラム文化史に関するフリアン・リベラの研究を継承し、1896 年にペラーヨの指導の下で博士号を取得し、1903 年にマドリード大学の教授となった後も長期にわたってペラーヨと書簡を交わし続けた。両者の書簡はアンヘル・ゴンサレス・パレンシアによって書簡集として再編され、20 世紀スペインのアラビア学雑誌 *Al-Andalus* に収められている (González Palencia 1947: 391-414)。次章ではその書簡集を分析し、ペラーヨとアシンの研究交流の実態、スペインのイスラム研究史における彼らの交流の意義、19 世紀後半から 20 世紀初頭のスペイン史学において両者の研究交流が有した意味について検討したい。

3. ペラーヨとアシンの研究交流の史学史的意義

3.1 イスラム思想史学における両者の研究交流

ペラーヨとアシンの書簡は 1947 年に出版された *Al-Andalus* の 12 巻目に収められているが、彼らは後者が博士号を取得する 1896 年から、ペラーヨが他界する前年の 1911 年まで書簡を交わし続けた (González Palencia 1947: 391-414)。スペインにおけるイスラム思想史学の基盤を形成した両者の間で 15 年以上にわたって交わされた書簡は、1896 年 5 月 19 日にアシンがペラーヨに宛てた書簡から始まっている。最初の書簡において、アシンは博士論文審査におけるペラーヨの好意的な評価に感謝を示し、師の下で行ったアル・ガザーリーの思想に関する研究を継続する旨を伝えている (González Palencia 1947: 392)。その上で、アル・ガザーリーの著書からの引用が多く見られるドミニコ会士レイモンド・マルタン (Raimundo Martí, 1220-1284) の著作『プギオ・

フィデイ』 (*Pugio Fidei*, 『モーロ人およびユダヤ人に対する信仰者の短剣』) の注記の複写を要求している (González Palencia 1947: 392-393)。ペラーヨはこの依頼を快く受諾する旨の書簡を 1896 年 5 月 26 日に送っているが、1896 年 10 月 7 日付の書簡によれば、他の役職により忙殺され着手できなかったようである (González Palencia 1947: 395) 7。また、冬期休暇中にアシンに資料を送るとも述べている (González Palencia 1947: 395)。

これらの書簡はアシンが 1896 年に博士号を取得した直後に送られたものであり、ペラーヨとアシンの研究交流の初期に位置付けられるが、上述した内容から後者が前者を指導者として捉え続けていたことが分かる (González Palencia 1947: 392-396)。それは 1897 年 2 月 2 日付の書簡において、アシンがペラーヨに彼の研究の進行状況やその後の計画を報告していることから明らかである。例えば、当書簡の以下の文面からそれを読み取ることができる。

私の尊敬すべき親愛なる師へ：あなたは私に送った注記の豊富さを私に知らせる先月 28 日の書簡が私に感じさせた喜びを想像することができないでしょう。本当はあなたが私にその事について話した最初の瞬間から、私たちの弁護者によるアル・ガザーリーの写しが少しの重要性しか持たず、量も少ないと思いつけていました。しかし、あなたが私に送った、注記を提示している多くのページを見たとき、私は幻を見てしまいました。

【…】

これは私の成果を出版する計画を全て変えてしまいました。【…】私の考えは、アル・ガザーリーがキリスト教の弁証学に及ぼした影響を研究することであり、そのためにはレイモンド・マルタンに加え、トマス・アクィナスの反アヴェロエス主義的な冊子とその他の作品、もし存在するのであれば何人かのスペインの反アヴェロエス主義者、そして私たちの間には事欠かないと思われる『プギオ』と類似するいくつかの作品まで見ようと思います。【…】 (González Palencia 1947: 399) (筆者訳)

この書簡において、アシンは 1896 年の冬期休暇から翌年の 2 月にかけてペラーヨから受け取った多量の注記を一読した上で、謝辞を述べている。同時に、その資料を受け取った上で変更した研究の方向性について詳述しているが、キリスト教の弁証学におけるアル・ガザーリーの影響に関する研究は、キリスト教思想におけるユダヤ・イスラム思想の流入について叙述したペラーヨの『異端者史』第二巻の四章目と内容が重なる (Menéndez Pelayo, *heterodoxos*, II: 151-202)。加えて、『哲学批評』においてペラーヨがスペイン思想史に対するイスラム思想の影響の重要性を主張していることや、『学術』において彼が独自に提起した学術体系の多くの項目とイスラム研究が関連していることを踏まえると、アシンの研究関心は師であるペラーヨの影響を受けていると言える。この点について、Aly Ahmed はペラーヨが観念の系譜の連続性を視点としつつキリスト教思想にお

けるイスラム思想の影響を理論化し、アシンがその理論を発展させたと述べている (Aly Ahmed 2018: 32-33)。また、上記引用において述べられているように、『プギオ・フィデイ』の注記に対する関心がペラーヨによる言及に根差していたことも両者の影響関係を裏付けている (González Palencia 1947: 399)。両者の初期の書簡と関連資料から読み取ることのできるこれらの側面は、アシンが師の研究を継承し、独自に発展させていくためにペラーヨの指導を必要としていたことを意味している。

一方、1897年2月2日付の書簡から4年後にアシンは再び頻繁に書簡を送り始めるが、それ以降の書簡には自律的に研究を進めつつペラーヨと交流するアシンの姿を見出すことができる (González Palencia 1947: 400-414)。例えば、1901年3月21日付の書簡において、アシンは彼が図書館の除籍本から発見したルネサンス期スペインのカトリック神学者および哲学者であるフランシスコ・デ・ビトリア (Francisco de Vitoria, 1492-1546) の写本について報告し、資料情報を提供している (González Palencia 1947: 402)。それを受け、ペラーヨはアシンに宛てた同年3月27日付の書簡においてその発見を重要と評価し、それを入手し彼と共有することを要求している (González Palencia 1947: 402-403)。このようにペラーヨに資料を提供していることや、1897年2月2日付の書簡から1901年3月21日付の書簡の間の4年間にペラーヨと書簡を交わしていないことを踏まえると、アシンはその間にペラーヨから継承した研究を自律的に推し進めていたと推察できる。アシン自身が1901年3月21日付の書簡において『アルガゼル：教義学、倫理学、美学』の初稿を1899年に書き上げ、ペラーヨに序文の寄稿を依頼していることから、書簡のやり取りがなかった4年間に自らの著作の執筆に着手していたことが分かる (González Palencia 1947: 401-403)。また、上記の著作以外に、1899年から1901年にアシンが発表した著作として *Lecciones de historia de la filosofía adaptadas al programa de dicha asignatura* (1899) や *Mohidin* (1899)、*El filósofo zaragozano Avempace* (1900-1901) が挙げられることも、その期間にペラーヨから継承したイスラム思想史研究を自律的に発展させていたことを示している (Valdivia Válor 1992: 197-199)。そのため、1899年前後からアシンの著作が社会的に認知され、彼とペラーヨの研究交流が一研究者同士の交流という様相を帯びてきたと少なくとも言える。アシンが1901年以降にペラーヨに宛てた書簡の大部分が序文の投稿依頼や彼の著作出版に関するものであったことも、この点を裏付けている (González Palencia 1947: 403-414)。

以上を踏まえると、書簡を通じたペラーヨとアシンの研究交流は以下の二つの時期を経たと言える。一つ目はアシンが博士号を取得した後にペラーヨのイスラム思想史研究を継承し、独自に発展させるために彼の支持や指導を求め続けた1896年から1901年である。二つ目はアシンの研究業績が多くの人から認知されることにより彼のアラビスタとしての評価が確立され、弟子でありながらも一研究者としてペラーヨと交流した1901年から1911年である。上記二期間にわたる交流の内容から、アシンがキリスト教思想におけるイスラム思想の影響というペラーヨの研究課題を継承することに強い使命感を感じていたと推察できる。1899年から1901年に出版された上記の著作

以外にもイスラム思想史に関する多くの著作を著していることは、その使命感を裏付けている。彼らがスペインの思想史的脈絡におけるイスラム思想の重要性を主張し、研究交流を続けたことにより、アル・ガザーリーをはじめとする著名なイスラム哲学者を輩出した文化的土壌を有するスペインに特有なイスラム研究の潮流が形成されていったのである。

次節では、イスラム研究におけるペラーヨとアシンの研究交流の意義を踏まえつつ、19 世紀末から 20 世紀初頭のスペイン史学における史学史的意義を検討する。

3.2 スペイン史学における史学史的意義

ペラーヨとアシンが書簡を通じた研究交流を行っていた当時は、自由主義やクラウゼ主義⁸⁾を擁護するスペインの歴史家達が中世から近世までの史的脈絡やスペイン固有の思想文化の存在を悲観視していた (Álvarez Barrientos 2012: 46)。彼らは中世から近世までスペイン社会の基盤であり続けたカトリック教会およびカトリシズムを思想や学術の発展に対する障害と見なし、19 世紀末から 20 世紀初頭におけるスペインの後進性の原因として位置付けていた (ペレス 2017: 219)。その一方、当時のスペイン史学にはフランスの実証主義歴史学が広く取り入れられると同時に、近代までの歴史学の形而上学的要素が唯物論的史観に取って代われつつあった (Menéndez Pelayo, *heterodoxos*, V: 483-486)。このように、当時のスペイン史学において旧来の知的潮流に批判的な進歩主義的傾向が強まる中、カトリシズムを軸に据えつつスペイン固有の思想潮流の重要性を主張するペラーヨの思想史学は正当な評価を得なかったのである。

ペラーヨ自身もこの状況を自覚しており、『異端者史』の序論において「スペイン人が自国の古い知的産物を見る際の忘却や軽薄さ」(筆者訳)を危惧している (Menéndez Pelayo, *heterodoxos*, I: 18)。当時のスペインにおける自国の学術成果の軽視は、思想史的脈絡を国民意識の基盤に位置付けていたペラーヨには重大な問題だったのである (José Martín 2012: 344)。また、アシンはペラーヨに宛てた 1901 年 7 月 25 日の書簡において「私はイスラム思想史に関する研究は用途のない珍奇なものであると耳にすることに慣れている」(筆者訳)と述べている (González Palencia 1947: 407)。そのため、19 世紀後半から 20 世紀初頭のスペイン史学において、思想史における異端者への関心が薄れていたのみでなく、その重要性を否定する意見も見られたことが分かる。ペラーヨとアシンはこのような時代の趨勢に逆らいつつイスラム思想史を研究したのである。

ペラーヨとアシンはこの逆境の中でイスラム思想史を研究したが、彼らを駆り立てていた動機はイスラム思想の史的的重要性のみではないと考えられる。例えば、ペラーヨは『異端者史』の序論において、セム思想やプロテスタント、照明派、その他の国内外の哲学潮流から成るイベリア半島の異端思想の全体像を構成することが重要であると述べている (Menéndez Pelayo, *heterodoxos*, I: 51)。つまり、ペラーヨはスペインの思想史的脈絡や異端思想の系譜におけるイスラム思想の重要性を主張していたのである。その一方、アシンはペラーヨとは異なり、キリスト教思想における

イスラム思想の影響自体を中心的な視点としつつ、スペインのイスラム思想の系譜を体系化している (Valdivia Válor 1992: 212-213)。同時に、イスラム思想に対するキリスト教徒の能動的な働きかけにも触れている。例えば、彼は東洋思想がアル・ガザーリーをはじめとする中世のイスラム哲学者によりスペインに伝えられ、中世を通してキリスト教徒により広められたことを指摘し、イスラム教徒とキリスト教徒の間に存在した双方向的な接触を明らかにしている (Valdivia Válor 1992: 98-99)。この点において、アシンもペラーヨと同様に国内外の思想潮流を考慮しつつ、正統と異端から成るスペイン思想史の体系性を重視していたと言える。また、19世紀末のスペインにおける異端者史への無関心も踏まえると、イスラム思想史学における彼らの貢献はその史学的重要性のみでなく、母国の思想史的脈絡を保とうとする愛国的な思想的立場に根差していたことが分かる。

しかし、ペラーヨとアシンのイスラム思想に対する強い関心は必ずしも思想史分野に限定されてはいなかった。両者が敬虔なカトリックであり、後者に関してはカトリック司祭でもあったことを踏まえると、彼らは教義学や教会史を補完する学問として異端者史を捉えていたと推察できる (Martínez Lorca 2007: 234)。ペラーヨは『異端者史』初版の第一巻への序章において、教会を中心とした彼の歴史観を強く反映する発言をしている。

【…】私はカトリックである、そしてカトリックとして全歴史の土台である神の摂理、啓示、自由意志、道徳律を肯定する。そして、もし私が書く歴史が宗教思想に関するものであり、これらの思想が私の思想、そして教会の教義と対立するならば、これらを非難する以外に何をすべきだろうか (Menéndez Pelayo, *heterodoxos*, I: 55) (筆者訳) 9)。

本引用から、ペラーヨが宗教思想に関連する著作を著す際に、カトリックを中心とした歴史観を軸に据えていたことが分かる。同著初版の序章において、「異端的視点から書かれた著作を扱う際に持つべき注意深さ」(筆者訳)が教会史を執筆するために重要であると述べていることも踏まえると、彼が異端者史を教会史と相補的な関係にある分野として位置付けていたと言える (Menéndez Pelayo, *heterodoxos*, I: 4, 31)。ペラーヨはキリスト教思想に対するイスラム思想の影響を教会史や教義史の体系を成す一分野として研究し、弟子であるアシンに継承したのである。後者がカトリック司祭であったことも、それを可能にした要因として十分に評価できよう。

以上を踏まえると、イスラム思想史研究を通じたペラーヨとアシンの研究交流はスペイン史学において二つの意義を有していたと言える。一つ目の意義は国内の学術成果の軽視や異端思想への無関心および悲観視により危機的な状況にあったスペインの思想史的脈絡の保持に貢献したことである。彼らは根底において愛国的な者であり、本来の史的脈絡を喪失することを歴史家として強く懸念していたのである。イスラム教徒は8世紀から16世紀初頭までスペインの思想文化や社会に著

しい影響を及ぼしたが、19 世紀後半から 20 世紀初頭のスペインではその歴史的経緯が歪曲されつつあったのである。スペインに固有なイスラム思想史研究の基盤を形成した功績は結果的に、思想史という領域を超え、スペイン史の脈絡の維持に寄与したのである。次に、二つ目の意義はイスラム思想史の研究を通して、教会史や教義史にも貢献したことである。異端者史は上記二分野に内包されており、相補的な分野として位置付けられているため、ペラーヨとアシンのイスラム思想史研究はそれらの体系化において重要な役割を果たしたのである。

4. おわりに

保守派の精神史学者であるペラーヨは、国内の学術成果や異端者史が軽視されていた 19 世紀後半のスペインにおいて『学術』を出版し、自国の文献学や文学、思想史学の史的脈絡を重視する愛国主義的な学術観を提起した。これらの分野の権威であった彼は敬虔なカトリックであったが、『異端者史』以外に『学術』や『哲学批評』においても異端思想に触れている。この点は彼の学術観の重要な構成分野として「スペインの異端者」が位置付けられていたことや、ヘーゲルの弁証法的歴史観からの影響を肯定していることと照合する。広く扱われている異端の中でも、イスラム思想史は上記著作において多くの章を割いて叙述されているため、ペラーヨはスペインの思想史的脈絡におけるイスラム教徒の役割を重視していたと言える。

ペラーヨのイスラム思想史研究における主な焦点はスペインのキリスト教思想に対するイスラム思想の影響であった。スペインの歴史的経緯に深く根差した独創的な視点からイスラム思想史を研究していた彼は本来の意味でのアラビスタではなかったが、国内外のアラビスタが相互に交わした書簡において多く言及されている。この点は、アラビスタであるフリアン・リベラやアシンと共に、ペラーヨが 19 世紀スペインのイスラム研究の系譜に位置付けられていたことを意味する。事実、アシンはペラーヨの指導の下で 1896 年にマドリード大学から博士号を取得した後も、彼と書簡を通じた研究交流を行いつつ上述した師の研究を発展させ、スペイン固有のイスラム思想史学の系譜を生み出した。このように、ペラーヨとアシンはイスラム思想史研究を通して当時の西洋にスペイン固有の知的潮流を認めさせることに成功したのである。この意味において、スペインのイスラム研究はフランスやイギリス等のオリエンタリズムとは発展の経緯が異なるのである。

その一方、彼らのイスラム思想史研究はイスラム研究以外に、スペイン史研究においても大きな意義を有していた。彼らは共に当時のスペインにおいてスペイン史学を取り巻いていた状況を危惧していたが、イスラム思想史も例外ではなかった。異端者史の軽視および悲観視は、中世スペインにおいては隣人でもあったイスラム教徒が中世を通して思想文化のあらゆる側面に多大な影響を与えたことや、アル・ガザーリー等の偉大なイスラム哲学者がスペインから生まれた事実を歪曲しつつあったのである。ペラーヨとアシンはこの趨勢に抗い力強くイスラム思想史を研究することにより上記の成功を収め、スペインの史的脈絡の保持に貢献したのである。また、異端者史は教会史や教義史と相補関係にあったため、彼らの貢献はこれらの学術分野の発展にもつながったと言えよう。

このようにペラーヨとアシンはイスラム思想史や異端者史を通して大きな学術的貢献をしたが、彼らが敬虔なカトリックであり、後者は司祭でもあったことは改めて興味深い。彼らは異端に対して不寛容であった当時のカトリックとは一線を画す歴史家であった。その寛容さがカトリック思想に対するイスラム思想の影響に着目することを可能にしたのだろうか。本稿では扱えなかったが、ペラーヨとアシンはスコラ哲学やトマス主義のようなキリスト教系学問に対するイスラム神秘主義の影響についても、多くの成果を遺している。今後は同テーマに関する彼らの著書を分析し、同時代の歴史家の叙述と比較することにより、19世紀後半から20世紀初頭のスペイン思想史学において、イスラムの思想体系とキリスト教系学問の影響関係がどのように扱われてきたかを検討したい。

注

- 1) 本稿において、『学術』は第三版、『異端者史』は第二版を用いる。
- 2) ペラーヨが書簡を通じた研究交流を行った国外の研究者の中には、イギリスとフランスにおけるスペイン学の創設者であるフィッツモーリス・ケリー (Fitzmaurice Kelly, 1858–1923) やアルフレド・モレル・ファティオ (Alfred Morel-Fatio, 1850–1924) がいた (H. Clarke 2012: 293-294)。
- 3) ペラーヨは『学術』第一部の第三章に、同時代の文学者および思想家であるマヌエル・デ・ラ・レビーリャ (1846–1881) の1876年の論文“Revista Crítica”を位置付けており、その中に「スペインはヨーロッパ文学史において存在感はあるが、自然科学においては全くである」(筆者訳)という記述が見られる (Menéndez Pelayo, *ciencia*, I: 86)。彼はその返事として論文“Mr. Masson Redivivo”を執筆し、スペインが自然科学において近隣国より遅れていたことを認めつつ、当分野の発展に貢献した重要な学者を例示し反論している (Menéndez Pelayo, *ciencia*, I: 99-101)。
- 4) ペラーヨはドミンゴ・グンディサルボに関する J. A. Endres (?–1890–?) や Clemens Baeumker (1853–1924) 等の著書や論文を引用している (Menéndez Pelayo, *heterodoxos*, II: 186)。
- 5) アシンはハンガリーのイグナーツ・ゴルトツィーエル (Ignaz Goldziher, 1850–1921)、スイスのアルナルド・シュタイガー (Arnald Steiger, 1896–1963) をはじめとする国外の多くのアラビスタとも書簡を交わした。彼らからアシンに宛てられたイスラム哲学に関する書簡にもペラーヨへの言及が見られる。そのため、イスラム思想史学におけるペラーヨの学術的貢献は19世紀後半から20世紀のヨーロッパで広く認められていたと考えられる (Marín et al., 2009: 643-862)。
- 6) 論集としては『メネンデス・ペラーヨ研究』 (*Estudios sobre Menéndez Pelayo*, ed. Florentino Pérez Embid. Madrid: Editora Nacional, 1956) や『「スペイン異端者史」研究』 (*«Historia de los heterodoxos Españoles» Estudios*, ed. Ramón Teja y Silvia Acerbi. Santander: PubliCanEdiciones de la Universidad de Cantabria, 2012) を挙げられる。

- 7) ペラーヨは 1896 年に複数の役職を兼任していたが、王立言語アカデミアと王立歴史アカデミアの中心的な会員であったことに加え、1892 年から王立歴史アカデミア図書館の司書を務めていた (Biblioteca de Menéndez Pelayo 2019 年 6 月 22 日参照)。これらの職務に忙殺されている期間にアシンから二通の書簡を受け取っている。一通目は 1896 年 8 月 8 日付であり、ペラーヨに再び『プギオ・フィデイ』の注記の複写を依頼している。一方、同年 10 月 23 日付の二通目も類似した内容であるが、一通目の書簡がペラーヨに届かなかったことを推察しつつ、より強い調子で同資料を求めている (González Palencia 1947: 393-395)。
- 8) クラウゼ主義は 18 世紀末から 19 世紀前半のドイツ人哲学者クラウス (Karl Christian Friedrich Krause, 1781-1832) の汎神論的な哲学思想である。思想家および法律家であるサンズ・デル・リオ (Julián Sanz del Río, 1814-1869) によりスペインに導入された (B. ギブニー 1988: 537)。
- 9) 『異端者史』初版には異端を強く批判する辛辣な表現が多いが、1910 年以降に出版された第二版の序文において、ペラーヨはそれが初版執筆当時 24 歳であった彼の未熟さ故のものであり、初版の独創性を失わない程度に表現を訂正したと述べている (Menéndez Pelayo, *heterodoxos*, I: 36)。

参考資料

【洋語文献】

- Álvarez Barrientos, Joaquín. 2012. “Matices de rechazo: el siglo XVIII en la Historia de los heterodoxos españoles”. En *«Historia de los heterodoxos Españoles» Estudios*, ed. Ramón Teja y Silvia Acerbi, pp. 15-51. Santander: PubliCan-Ediciones de la Universidad de Cantabria.
- Aly Ahmed, Eneas. 2018. “El proyecto intelectual de Asín Palacios: nuevas vías dentro del pensamiento conservador español desde la perspectiva arabista”. En *Miscelánea de estudios árabes y hebraicos. Sección Árabe-Islám*, Vol. 67. pp. 29-51. España: Universidad de Granada-Servicio de Publicaciones.
- Artigas, Miguel. 1939. *La vida y la obra de Menéndez Pelayo*. España: Editorial Heraldo de Aragón.
- Asín Palacios, Miguel. 1901. *Algazel: Dogmática, Moral, Ascética*. Zaragoza: Tipografía y librería de Comas hermanos.
- de la Plaza, Luis Prados. *Memoria de Marcelino Menéndez y Pelayo (1856-1912)*. Madrid: Fundación Universitaria Española, 2006.
- Farinelli, Arturo. 1956. “la Labor y la Figura Intelectual de Menéndez Pelayo”. En *Estudios sobre Menéndez Pelayo*, ed. Florentino Pérez Embid, pp. 13-55. Madrid: Editora Nacional.

- González Palencia, Ángel. 1947. “Correspondencia entre Menéndez y Pelayo y Asín”. *Al-Andalus: Revista de las Escuelas de Estudios Árabes de Madrid y Granada*, Vol. XII. pp. 391-414. España: Instituto Miguel Asín.
- H. Clarke, Anthony. 2012. “Menéndez Pelayo desde una perspectiva europea”. En *Menéndez Pelayo. Cien Años Después-Actas del Congreso Internacional*, pp. 293-302. Santander: UIMP.
- José Martín, Francisco. 2012. “Anti-Modernidad y heterodoxia (notas sobre una nueva lectura de La Historia de los heterodoxos españoles)”. En «*Historia de los heterodoxos Españoles Estudios*», ed. Ramón Teja y Silvia Acerbi, pp. 333-354. Santander: PubliCan-Ediciones de la Universidad de Cantabria.
- Marín, Manuela., De la Puente, Cristina., Rodríguez Mediano, Fernando., Pérez Alcalde, Juan Ignacio. 2009. *Los Epistolarios de la Julián Ribera Tarragó y Miguel Asín Palacios. Introducción, Catálogos e Índices*. Madrid: Consejo Superior de Investigaciones Científicas.
- Martínez Lorca, Andrés. 2007. *Maestros de Occidente: Estudios sobre el Pensamiento Andaluz*. Madrid: Editorial Trotta.
- Menéndez Pelayo, Marcelino. 1948. *Ensayos de Crítica Filosófica*. 3ª ed. Santander: Consejo Superior de Investigaciones Científicas.
- . 1946. *Historia de los heterodoxos españoles*. I, 2ªed. Santander: Consejo Superior de Investigaciones Científicas.
- . 1947. *Ibid.* II, 2ªed. Santander: Consejo Superior de Investigaciones Científicas.
- . 1947. *Ibid.* V, 2ªed. Santander: Consejo Superior de Investigaciones Científicas.
- . 1948. *Ibid.* VI, 2ªed. Santander: Consejo Superior de Investigaciones Científicas.
- . 1948. *Ibid.* VIII, 2ªed. Santander: Consejo Superior de Investigaciones Científicas.
- . 1953. *La Ciencia Española*. I. 3ª ed. Santander: Consejo Superior de Investigaciones Científicas.
- . 1954. *Ibid.* III. 3ª ed. Santander: Consejo Superior de Investigaciones Científicas.
- Valdivia Válor, José. 1992. *Don Miguel Asín Palacios: Mística cristiana y mística musulmana*. Madrid: Ediciones Hiperión.

【邦語文献】

ペレス、ジョゼフ、小林一宏訳（2017）『ハプスブルク・スペイン 黒い伝説：帝国はなぜ憎まれるか』東京：筑摩書房。

【オンライン資料】

Biblioteca de Menéndez Pelayo. Marcelino Menéndez Pelayo Cronología.
<https://www.bibliotecademendezpelayo.es/cronologia/>, (参照 2019-06-22).

【辞書】

B. ギブニー、フランク（1988）『ブリタニカ国際大百科事典』小項目事典 2: カナーコン、
東京：ティビーエス・ブリタニカ。